

蒼
き
狼

井
上
靖

文藝春秋新社

蒼き狼
井上靖

蒼き狼

昭和三十五年十月十日 初版
昭和三十六年一月十日 七版

定価 三二〇円

著者 井上靖 やすし

発行者 車谷弘

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西八ノ四
銀座口座東京七八七四三番

印刷 凸版印刷
製本 加藤製本

蒼

ぎ

狼

裴
頓

川

端

龍

子

一章

西紀一一六二年のことである。黒竜江はその上流に於て、オノン、ケルレンの二つの支流に岐れるが、その流域の草原地帯や森林地帯に居住する遊牧民モンゴルの聚落の首都の幕舎（包）に、一人の男児が生まれた。産婦はホエルンと呼ばれる、まだ二十歳を幾つも出ない若い美貌の女性であった。時たまたまこの聚落の男たちは、この地方で長く相争つて来た他部落のタタル族との合戦のために全部出払っていたので、聚落の何百という幕舎の中に居るのは、老人か女子供たちばかりであった。

ホエルンは、男児の誕生を部落から十里程離れた戦線に居る夫のエスガイのもとに報じるために、一人の老いた下僕を幕舎から送り出した。ホエルンは夫への使者を出してから、改めて自分の腹から出たばかりの嬰兒の顔に眼を当てた。嬰兒は襁褓布の中に転がされてあった。嬰兒を取り上げた女たちも開かすことのできなかつたその左の手指は相変らず固く握りしめられたままになっていた。ホエ

ルンは自分の産んだ子の四肢が完全であるかどうかを確かめようとする母親の持つ本能的な執拗さで、その握りしめられた左掌を何とかして開かせようと思った。それは少しの粗暴さも許されぬ、非常に繊細な注意を要する仕事であった。ホエルンは時折、嬰兒の掌から手を離すと、幕舎の上をごうごうと吹き過ぎて行く風の音を聴いた。風は大河の流れのようにあるポリウムを持った物体として、東から西へと地軸を揺り動かしながら移動して行くのが感じられた。風の流れが絶えると、その度にホエルンは自分が身を横たえている幕舎と対合している漆黒の夜空の高さを思い出し、そこに無数の星が鑲められて、その一つ一つが冷たい光をもって輝いている様を眼に浮かべた。が、やがて次の風が吹き荒れて来ると、星を刺繍した黒い布地は吹きまくられ、星はちりぢりに四散して、あとは天地を埋める風の音だけになった。風が吹こうと、星空が幕舎に覆いかぶさろうと、孰れにしてもホエルンは、自分がいまひどく小さくて貧しい幕舎の中に居るという思いを持っていることには変りなかった。

この自分たちが大自然の中の無力な小さい点であるという思いは、牧草を求めて転々とし、定住する家屋も、定住する土地も持たない遊牧民たちの誰もが必ず心の底のどこかに持っていて、いかなる行動もいかなる考えをも、結局はその根底に於てそれを支配する民族の呪文のようなものであったが、この夜のホエルンの場合には、そうした寄辺のない孤独な思いを一層強める他の理由を持っていた。この夜のホエルンには幕舎を透して夜空は一層高く見え、幕布を揺り動かす風の力は一層狂暴なものに感じられた。

母になった許りのホエルンは、いま二つのことに心を傷めていた。一つは自分が産んだ嬰兒が、充

分に夫エスガイを満足させるような完全な体軀を持ったものであるかどうかということ、それからもう一つは、嬰兒が夫エスガイを充分納得させるように彼に似た眼鼻立ちを持っているかどうかということであつた。

併し、この二つの心配事のうちの一つは、やがてホエルンの心から取除かれることができた。嬰兒は母親の掌の中で、それまでそこに預けていた自分の小さい手指を、恰もそれが自分の意志でもあるかのように自分で開いたのである。嬰兒は髀石（獸骨の玉）の形をした血の塊りを、勲章でも握りしめるように確りと握りしめていたのであつた。

もう一つの心配事である生まれたばかりの嬰兒の顔容（かたち）については、ホエルンはその嬰兒が夫エスガイの子であるといういかなる証拠も確信も、そこからは得ることができなかった。嬰兒はエスガイに似ているようでもあり、似ていないようでもあつた。それと同様に、ホエルンのこうした悩みのもととなっている、もう一人の男の顔にもまた、似ているとも似ていないとも言えなかつた。はっきり言えば、嬰兒は誰にも似ていなかった。ただ一人、自分が体内から出た母親だけに似ていたのである。

ホエルンはエスガイが嬰兒の誕生を知つて、それに対していかなる氣持を持つつか、全く想像はつかなかつた。エスガイは、妻の妊娠に対するに、終始この部族の勇者が例外なく持っている寡黙と無表情とをもつてしていた。悦んでいるのか、怒っているのか、その内心の感情は、一切本人以外の何人も窺い知ることは出来なかつた。併し、嬰兒の出生を報告することによって、ホエルンはそれに対する夫の言葉を初めて聞くことが出来る筈であつた。例え殺せという言葉が彼の口から出たとしても、さして不思議とすることではなかつた。

エスガイの許に遣わされた老僕は次の日の夕方幕舎へ戻って来た。そして彼は若き母親にエスガイが嬰兒のために選んだ鉄木真^{テムジン}という名前を伝えた。ホエルンはそれを聞いて出産後初めて安堵の色を面に浮かべた。少くとも、夫エスガイが、自分の産んだ子供に対してその存在を呪うほどの憎しみを持っていないということだけは判ったからである。併しそれ以外のことは、やはり一切不明であった。何故なら、老僕の話によれば、鉄木真^{テムジン}という名の謂われは、ホエルンにとって如何ようにも解釈される意味を持ったものであったからである。

「わしがエスガイ様の陣に到着した時は、丁度タタル族をさんざんにやっつけて戦捷の宴を張っている時だった。篝火の傍には敵の首領株の者が二人捕虜にされて縛られていた。酒宴も半ばと思われる頃、その首領の一人は引き出されて首を刎ねられたが、エスガイ様はこんどの戦捷を記念する意味で、その首領の名テムジンを生まれた子につけよとの仰せじやった」

老僕はそう語った。戦捷を記念するという意味をそのまま素直にとればそれでもよかったが、併しその名が首を刎ねた敵方の首領の名であると判ってみると、ホエルンとしてはそこに何か釈然としないうものがあるのを感じないわけには行かなかった。エスガイが嬰兒の出生を悦んでいるか、憎んでいるかは、依然としてホエルンには謎であった。

併し、兎に角こうして、母親さえその父親をはっきりと知らぬ一人の嬰兒は、鉄木真^{テムジン}と名付けられ、モンゴル部族の一人の頭領の長子として帳幕の中に生い育つ運命をここに与えられたわけであった。

ホエルンはそれから何日間かを、産後の病患のために高熱に苦しみながら生死の間をさ迷った。そして熱がとれて漸く一命を取りとめたとき、彼女の弱々しい眼が初めて捉えたものは、夫エス

ガイが嬰兒鉄木真を抱き上げて立っている姿であった。

ホエルンがエスガイの妻となつたのは、その時から十カ月程前のことであつた。ホエルンはオルクヌウト部落の出であつたが、メルキト部落の若者に掠奪され、メルキトの聚落に拉致されて行く途中、オノノ河畔に於て、エスガイの手に依つて二重の掠奪を受け、ついにエスガイの妻となつたのである。ホエルンはメルキト部落の若者にも十数回に亙つて犯されていたので、エスガイの妻となつてからの出産ではあつたが、生まれた子を二人の男性の孰れを父とするかを決めることはできなかったのである。

ホエルンは鉄木真を抱いている夫の横顔に眼を当て続けていた。エスガイは通常エスガイ・バガトル（勇者エスガイ）と呼ばれ、豪胆と勇武とをもつて鳴り、他部族から怖れられている人物であつた。そのエスガイの精悍な横顔からは、相変らずいかなる愛情も汲み取ることとはできなかったが、ホエルンは夫が鉄木真を自分の大きな腕の中に抱きとつているということ、さすがに吻とする思いを持つた。そしてその吻とする思いは次第にはつきりと自分でも説明できない強い感動に變つて行き、それがホエルンの頬を涙で濡らした。

当時モンゴル部族が生活を営んでいた中国の万里の長城以北の地、所謂塞外の地には、何種族かの遊牧民族が各地に屯ろしていた。この地は東方を興安嶺に依つて、西方をサヤン、唐努、アルタイ、天山の諸山脈によつて大きく遮られ、南方は万里長城に依つて中国に、ゴビ沙漠に依つて西域に隣接

していた。また北方はバイカル湖付近を境として、シベリヤの底知れぬ無人地帯へと飲み込まれている。そしてこの大山脈と沙漠と無人荒蕪の地に囲まれた広大な高原には六本の河が流れていた。オノン、インゴタ、ケルレンの三河は合して黒竜江となってオホーツク海に注ぎ、ツラ、オルコン、セレンガ河の三流はいずれもバイカル湖にはいつている。これらの二水脈はみな中部の高原地帯から発し、その流域は草原地帯や森林地帯を形成していて、往古から各種の遊牧民族がここに興り亡んでいた。匈奴も、柔然も、突厥も、回鶻もこの地を根拠地として、唯一の出口である南方へ勢力を張ろうとしたので、中国の歴代の為政者たちは万里の長城を構築して、北方遊牧民の寇略に備えなければならなかったのである。

モンゴルがいつの頃からこの地に移り住んだかは不明であるが、八世紀前後には他の諸聚落と共に突厥の勢力下に、八世紀中葉は突厥に替った回鶻に隸属し、九世紀以後は回鶻に替った韃靼の支配下にあった。併し、韃靼が衰えた以後は、それぞれ頭髮と皮膚の色と多少の習俗とを異にした幾つかの血の違った民族がそれぞれ聚落をなして広大な高原のあちこちの草原地帯にばら撒かれ、一年中畜群と婦女と牧草の奪い合いに明け暮れていた。

鉄木真の生まれた十二世紀の中葉には、モンゴル部の他に、キルギス、オイラト、メルキト、タタル、ケレイト、ナイマン、オングトといった諸部族がこの蒙古高原地帯の住民たちで、その中でモンゴルとタタルの二部族がこの高原地帯に於ける諸聚落の指導権を握ろうとして、絶えず小戦闘を繰返していた。鉄木真の生まれたのは、この二部族の闘争の最中であつたのである。

こうした異部族間の闘争の他に、同一部族内に於てもそれぞれ、仲間の利益のために骨肉相食む争

いを繰返していた。モンゴル部族も幾つかの支族に分れ、各支族は独立した聚落をもって、ともすれば拮抗しがちであったが、エスガイの属するボルジギン氏族は昔から一応モンゴルの本家筋に当る家柄となっており、全モンゴル部族の支配者とも呼ぶべき汗（主権者）を何人かその中から出していた。第一代目の汗は鉄木真の曾祖父にあたるカブルで、この人物がそれまで統一なくばらばらになっていたモンゴルの諸聚落を曲りなりにも一つに纏め、部落全体の利益のために他部族に当る体制を調えたのであった。二代目の汗にはタイチュウト氏族のアムバカイがなったが、三代目はまたボルジギン氏族に移り、エスガイの父クトラが汗となり、現在エスガイが四代目の汗になっているといった状態であった。

鉄木真テムジンはこうした情勢下の蒙古高原にあって、モンゴル部族の頭領の幕舎の中に生い育って行った。ホエルンは、鉄木真を産んでから二年おいてカサルを、更に二年おいてカチグンを産んだ。いずれも男児であった。鉄木真は六歳の時にこれらの二人の弟を持つにいたったわけであるが、この他に更に父エスガイが他の女に産ませた一歳違いのベクテル、二歳違いのベルグタイの二人の弟を持っていた。鉄木真は幕舎の中で、これらの同腹、異腹の弟たちと一緒に暮した。エスガイは子供たちには頗る公平であった。五人の子供たちをいつも平等に取扱ひ、誰か一人を特別に可愛がるようなことはなかった。これはまたホエルンも同じことだった。彼女は自分が腹を傷めた三人の子供も、他の女に出来た二人の子供も、些かも区別するようなことはしなかった。ホエルンは夫が鉄木真に対して特別な扱いをしなかったように、彼女も亦夫が他の女に産ませた子供たちを特別扱いにしなかった。そうした点は、ホエルンは聡明な女であった。

鉄木真が七歳の時、ホエルンはもう一人の子供テムゲを生んだ。七歳の鉄木真は同じ年齢の子供より体が一回り大きく、腕力も強かったが、めったに口をきかないむっつりした子供であった。極く、たまにしか喧嘩をしなかったが、喧嘩をすると思いきった事をした。いつも相手の憎まれ口を眼を光らせながら黙って聞いていて、相手が喋ることがなくなつたと知ると、一言も口から出さないでいきなり襲撃した。相手を押して倒して、馬乗りになつて石で殴りつけるとか、砂の中へ頭を突っ込んで足で踏みつけるとかした。そうした攻撃の仕方には、どことなく残酷なものがあつて、それを止めに来た大人たちの眼には、鉄木真は氣心の判らない、可愛げない子供に映つた。そんな時大人たちは、鉄木真を自分等と同じ年齢の人間のように錯覚し、大人でも咎めるように大抵鉄木真の方ばかりを叱つた。

併し、そうした時を除けば、鉄木真は單に無口で目立たない子供であるに過ぎなかった。鉄木真は自分が年長だったので、母のホエルンを幼い弟たちに譲らねばならず、ホエルンの膝や腕に纏いつくというようなことはなかったが、やはり少しでも母から近いところに座を取りたい氣持は、他の子供たちと變りはなかった。

鉄木真が、初めて自分の部族の祖先の話やその伝承に耳を傾けたのは、七歳の時であつた。遠縁に當る人物にブルテチュ・バガトルという老人があつた。バガトル(勇者)の呼称を持つているくらいだから、ブルテチュは若い時は勇者であるに違ひなかったが、その頃は頬にも顎にも白い髯を蓄えた子供好きの柔和な老人であつた。この老人は優れた記憶力を持つていて、時折親族縁者の者たちがエスガイの幕舎に集まる時など、何代も何代も前の祖先のことをみなに話して聞かせた。自分がその人物

を実際に見知ってでもいるように、その人物の容貌風姿から性格まで詳しく話し、聞く者を倦かせなかった。

ブルテチュ・バガトルは人が集まりさえすれば、必ず自分の頭に詰め込んであるものを糸でも手繰り出すように引張り出す役割を忠実に勤めた。それで、彼の話のある部分は多勢の者にすっかり覚えられていたが、併し、誰もブルテチュのようになくは話せなかったし、また彼のように際限もない程の長い話を頭にしまい込むことなど思いもよらなかった。

ブルテチュが語り出そうとする時、人々は口々に自分が記憶していることを先きに口から出そうとした。

——バタチカン、バタチカンの子がタマチャ、タマチャの子がゴリチャル・メルゲン、ゴリチャル・メルゲンの子がアウジャン・ボログル、アウジャン・ボログルの子がサリ・カチャウ、サリ・カチャウの子がエケ・ニドン、エケ・ニドンの子がセム・リチ。

こんな風に一人が自分たちの祖先の代々の当主の名を口にしてここで詰まると、他の誰かがそのあとを続けた。

——セム・リチの子がカルチュ、カルチュの子がボルジギタイ・メルゲン、ボルジギタイ・メルゲンはモンゴルジン・ゴアという美しい妻を持ち、その二人の間に出来た子が、トロゴルチン・バヤン、トロゴルチン・バヤンはボロクチン・ゴアというこれも美しい妻を持ち、他に若党ボロルダイ・スヤルビと二頭の駿馬ダイル、ボロを持った。

一番記憶のいい者も大抵この辺で詰まった。これからあとは、つまり妻の他に二頭の馬と若党を持

った十代目の当主トロゴルチン・バヤン（富者トロゴルチン）以降は急に子沢山になり、記憶しなければならぬ人物は急に樹枝状に大きく拡がり、もはやブルテチュの非凡な記憶力に俟つ以外仕方があったのである。ブルテチュは人々が詰まると満足そうに皺の多い顔に笑みを浮かべ、そしてそこからゆっくりと話し出した。勿論ブルテチュの話はモンゴル家の歴代当主の名前を単に羅列するだけではなかった。

「トロゴルチン・バヤンと細君のボロクチン・ゴアはえらく仲のええ夫婦じゃった。あんまり仲がよすぎたので、一つ眼玉の子ができた。そこでドワ・ソホル（盲人ドワ）と名を付けた。一つの眼は額の真ん中に縦についていたが、これがまたよく利く目玉で、嘘のような話だが三日行程の向うまで見ることができた。ドワ・ソホルのあとはドブン・メルゲン（能射者ドブン）が生まれた。やがて二人はいきのいい若者になった。ある時兄弟は狩に出たが、ドワ・ソホルは平原を見渡して、遠くをええ女子が通っている、嫁に行くところらしい。明日あたりここを通るから、ここへ来た時かっぱらって、ドブン・メルゲンよ、お前の嫁にするがいいと言った。ドブン・メルゲンは本當にしなかったが、翌日その場所へ行って待っていると、本當に嫁入りの娘を真ん中にした一団がやって来た。若者は弓を引き、刀を揮って、彼等に襲いかかった。アラン・ゴア（美女アラン）がドブン・メルゲンの妻になったのはこうした経緯^{いきさつ}じゃ。二人の間にはすぐ子供が生まれた。兄がベルグネテ、弟がブルネテイ。それそれベルグネット氏、ブグネット氏の祖先になるわけじゃ。さて、アラン・ゴアを手に入れたドブン・メルゲンだが、この人は惜しいことに若くして妻と二人の子供を残してみまかった。併し、アラン・ゴアは二人の子供を育てながら、次々と三人の子供を産んだ。夫はなくても幾らでも子供はでき

る。と言って、アラン・ゴアは貞淑な女だから、決して男などは作らぬ。どうして子が出来たかと言うと、いつも妊娠する前に、天の一角から光が射して来て天窓からはいり、アラン・ゴアの躰の白い肌に触れる。こうして生まれたのがボク・ハタギ、ボハト・サルジ、ボドンジャル・モンハック、それぞれハタギン氏、サルジカッタ氏、ボルジギン氏の祖先じゃ。ボドンジャル・モンハックの流れを汲むわれわれボルジギン氏族の者の躰には、だから、美女アランの血と天の光が入り混ってはいっているわけじゃ」

こうした調子であつた。そしてボドンジャル以降の歴代の勇士の武勇談を、ブルテチュは次第に詳しく、次第に生き生きと物語った。ボドンジャル以降、現当主エスガイまで十代あつて、語るべきことが沢山あつたので、とても一晚では語り尽くすことはできなかった。

七歳の鉄木真には、一つ眼のドワ・ソホルの話だけが印象的で、その他のことはたいして興味も惹かなければ、よく理解もできなかった。それよりも、部族全体の何かの大きな集会の時、ブルテチュもその一員となつて何人かの古老たちが、幕舎の前の広場でモンゴルの源流に関する伝承の祈禱のような形で唱和することがあつたが、その時聞く祈禱の文句の内容の方が、鉄木真にはずっと面白かつた。

——上天より命ありて生まれたる蒼き狼ありき。その妻なる慘白き牝鹿ありき。大いなる湖を渡りて来ぬ。オノン河の源なるブルカン嶽に營盤して生まれたるバタチカンありき。

それはそうした唱和で始まる短い文句で、間もなく煩瑣な儀式の中に吸収されてしまうものであつたが、ここに唱われる狼と牝鹿の交配によつて最初の祖先バタチカンが生まれたという伝承は、ボル

ジギン氏、タイチュウト氏とを問わず、全モンゴル人の心に、それが語られる度にいつも異様な感動を呼び起すものであった。人々はみなこの話を信じていた。大いなる湖というのはずっと西方にあるもので、逞しい狼はそこを神の命に依って渡って来、優しく美しい牝鹿を妻としたものである。

ブルカン嶽というのは部族民の誰一人知らない者のない山であった。モンゴル部の者はどこへ幕舎を移動しようと、生まれてからずっと毎日のようにこのブルカン嶽を仰いで育って来たのである。

鉄木真も、この蒼き狼の話から大きい感動を受けた。鉄木真は自分が狼と牝鹿の子孫であるということに満足であり、そうではない他部族のことを思うと、そうした他部族の者が哀れにも卑しくも思われた。要するに鉄木真は、自分の体内に狼と牝鹿の血が流れていることに大きい誇りを感じたのであった。

鉄木真がブルテチュを交えた何人かの古老の不可思議な唱和を聞いたことは、彼の幼少時代に於ける一番大きい出来事であった。勿論、古老たちの唱和する言葉の意味は、七歳の鉄木真の頭では理解し難く、母のホエルンに依ってその意味を説明されたものであったが、鉄木真は古老たちが唱和している間、その低く厳かな歌声の中に大きく逞しい狼と、優しく美しい牝鹿の幻影を見ていた。狼は鋭い眼を持っていた。その眼は遠眼の利くドワ・ソホルのそれより遙かに遠くを見得る眼であり、それはそこに現われる何ものをも捉えて離さぬ、怖れというものを全く知らぬ眼であった。いかなるものにも立ち向う攻撃精神と、自分の欲するいかなるものも自分のものとする強い意志を、その冷たい眼の光は持っている。体軀は全く攻撃のためにつくられたものである。きりりと立った耳は、千里の遠くの物音をも聞き逃すことなく、その躰を構成している一片の骨も、一片の筋肉も、敵を屠るための